

# 「箱入り息子」

—初稿—

2024/8/15

米俵

〈人物表〉

高橋 聡美	(43)	主婦
高橋 恵子	(64)	姑
高橋 壮輔	(36)	息子

〈ログライン〉

・聡美は、壮輔を姑から遠ざけ、独占する話

〈ねらい〉

・ホラーを書く

1. 高橋家・外観（昼）

築40年程度の大きめの一軒家。  
カーテンは一切開けられていない。  
入口以外の部分は、3m程度の庭に囲まれている。  
庭の手入れはされていない。

2. 高橋家・室内（昼）

薄暗い玄関。靴は一足も出ていない。  
靴箱の上には和風アレンジの造花が飾られている。  
玄関から続く廊下には猫用のトイレが置かれている  
が、生き物の気配はない。  
インターホンが鳴る。  
誰も応答しない。静かな状態が続く。  
扉をノックする音。だんだんと強まる。  
年配の女性の声「聡美さん？ 聡美さんいるんでしょ？」  
外にいる人物が扉を開けようとする。

年配の女性の声「壮ちゃん？」  
ガチャガチャと扉を開けようとする音だけが響く。  
× × × × ×  
薄暗いLDK。リビングの棚には家族写真が飾られ  
ている。

高橋聡美（43）キッチンで昼食の準備をしている。  
玄関から声がするが無視している。  
聡美、昼食を二階へ運ぶ。足音を立てずに歩く。  
部屋をノックして、

聡美 「壮ちゃん、昼食……」  
部屋からの応答はない。  
聡美、ゆっくりと扉を開ける。  
部屋の一部には、玩具やペン、落書き帳が散らばっ  
ている。

聡美、笑顔で、  
聡美 「じい、置いておくれ」  
少年の声「うん。ありがとう」  
聡美、ゆっくりと扉を閉める。

一階から鍵を開ける音。

聡美、落ち着いた様子で階段を降りていく。

玄関の扉がドアガードだけの状態になっており、そ

こから高橋恵子（64）が覗いている。

恵子 「あつ、聡美さん。丁度良かった。開けてくれない？」

聡美に慌てる様子はない。扉に近付き、

聡美 「お義母さん、またいらっしやっただんですか？」

恵子 「ね、早く開けて」

聡美 「突然来られても困りますので」

恵子 「外暑いよ。中に入れて頂戴」

聡美 「(笑顔で)お帰り下さい」

恵子 「壮ちゃんに会ったらね」

と言って、力いっぱいドアを引っ張る。ガシャン  
という音が家中に響き渡る。

聡美 「壮輔は寝ています」

恵子 「はいはい」

恵子、ドアガードにゴムをかける。

聡美 「健吾さんと一緒にお越しく下さい」

恵子 「(強めに)あんた狂ってるよ」

と言いながら、ゴムを使い、ドアガードを外す。

聡美、開くのを押さえる。

力を入れているが、涼しい表情。

ドアの引っ張り合いになる。

恵子、険しい表情で、

恵子 「なんで、息子の家に入るのにこんなことしなきゃいけないのよ」

聡美 「私の家でもありますので。どうぞ、お帰り下さい」

恵子 「元は私の家ですけどね？」

恵子が力負けし、ドアがボタンと閉まる。

聡美、鍵を閉める。

ドアスコープから外を確認する。

人の気配はない。

聡美、ドアガードに付けられたゴムを取る。  
リビングの方から窓が開く音。

聡美、リビングへ向かう。

× × ×

恵子、ソファアに座って、

恵子 「あー、涼しい」

ガラスがくり抜かれ、鍵があいている。

聡美、落ち着いた様子で、

聡美 「お義母さん。靴……脱いでもらえますか？」

恵子 「私ったら。まだ海外にいた頃の癖がぬけないのねー」

恵子、面倒臭そうに靴を脱ぐ。

恵子 「ねえ、お茶も出ないの？」

聡美 「ごめんなさい。今、切らしてまして」

恵子、鞆からペットボトルを取り出し、飲み干す。

恵子 「壮ちゃんは？」

聡美 「生憎、寝ております」

恵子 「昼間に……ね」

恵子、聡美を睨む。

聡美 「寝るのが好きなんです」

恵子 「嘘言っじゃないよ」

聡美 「嘘？」

恵子 「私がいた時はそんなことなかった」

聡美 「お義母さんが一緒の時は眠りが浅いみたいで……」

恵子 「そりゃ、嬉しくて興奮してるからだろ」

聡美 「安心して下さい。前より体調は良くなっていますよ」

恵子 「は？ 私が一緒だと駄目ってことかい？」

聡美 「（笑って）そんなこと言ってませんよ」

恵子 「あんたと話していると気が滅入るね」

恵子、立ち上がった、

恵子 「本当おかしな嫁をとっちゃったよ、あの子は」

と、階段へ向かう。

聡美、すぐ後ろをついていく。

廊下に出る二人。聡美、恵子の腕を掴み、

聡美 「お義母さん。お手洗いでしたら、こちらですよ」

と、そのまま強く引っ張る。

恵子、転倒するが、受け身をとる。

立ち上がりながら、

恵子 「聡美さん、bathroomの場所は教えて頂かなくて結構」

聡美、作り笑いで、

聡美 「そうですか」

恵子 「壮ちゃん、壮ちゃん」

と、大声で呼びながら、階段へ。

恵子、すぐ後ろにいる聡美を確認し、階段の手すりをしっかりと掴み上っていく。

聡美、すぐに恵子の服を掴んで、

聡美 「もう宜しいじゃないですか」

恵子 「何が」

聡美 「元気でやってますから」

恵子 「(強めに)あんたが閉じ込めてるのは知ってるんだよ」

聡美 「勘違いですよ」

恵子 「いいから、放しなさいよ」

と、聡美の手を振り払い、階段を駆け上がる。

聡美、恵子の足をつかむ。

恵子、振り払おうともがく。

ヒートアップする二人。

聡美、恵子に押され、階段から落ちる。

恵子、その隙に部屋の前まで駆け上がる。

ゆっくりと扉を開けながら、

恵子 「壮ちゃん、お迎えに来たよ」

少年の声 「ママ」

聡美、物凄い形相で階段を駆け上がる。

部屋に入ろうとしていた恵子の太ももに剣山を突き刺す。

恵子 「きゃー」

と、叫び転がる。

聡美、咄嗟に部屋のドアを閉める。

部屋の中から、

少年の声 「泣きそっとな声で(ママ、どうしたの?)」

恵子、剣山を抜く。血が流れる。

立ち上がろうと出来るが出来ず、転ぶ。必死でドアノ

づに手をかけようとする。

聡美、恵子の髪を引っ張り、階段から落とす。

恵子、転がり落ち、階段下で動かない。

聡美、その様子を満足そうに見る。

その後、何事も無かったかのように部屋に入り、

聡美 「壮ちゃん、ごめんね。恐かったね」

恰幅のいい男、高橋壮輔（36）を抱きしめる。

声変わりしていない声（少年の声）で、

壮輔 「何かあったの？ ママは？」

聡美 「壮ちゃんは、気にしなくていいの。大丈夫よ」

聡美、壮輔の頭を撫でる。

聡美 「壮ちゃんのママは、御用があつて帰ったの」

壮輔、聡美の胸に顔をうずめる。（小さな子供が泣

くような仕草）

聡美 「大丈夫。壮ちゃんには私がいるからね」

と、壮輔の頭を優しく撫で微笑む。

（終わり）